

生命科学の研究と教育

野村 靖 幸*

近年の生命科学発展の大きなうねりは、基礎科学の各分野ばかりでなく、応用科学技術の諸分野にも鋭くインパクトを与えています。これは日本の科学技術政策における四つの重点分野（生命科学、ナノテクノロジー、情報、環境）の中の一つとして、生命科学もリストされていることによく表れています。今後のさらなる生命科学の発展に私たちがぜひ貢献したいものです。

さて、世界をリードする生命科学研究成果をあげ、さらに次代を担う第一線の生命科学研究者を養成するという責任を有するわが国の大学・研究機関の研究・教育の体制にも、近年改革の動きが認められます。また、最近、日本生化学会の研究体制検討委員会（委員長：山村博平教授）が、大学院学生の経済問題、ポストドクターの就職問題、さらに科学研究費の諸問題等について具体的提言をまとめ、各方面に要望しました。ここで取り扱われた内容は時宜を得ている重要事項であり、その早期実現を期待したいと思います。

大学における生命科学の研究、教育は、主として、複数部局においてそれぞれ個別の立て割りシステムの中で行われてきましたが、近年、部局の壁を越え弾力的に研究・教育体制を構築し、統合的・融合的に研究、教育を実施するケースが次第に増えてきています。この部局横断的研究・教育体制は、共同研究を実施することによる研究の活性化といった点や、大学の優秀な人材の研究・教育における有効活用といった点、さらに大学院学生にとって履修対象の範囲を広げ研究課題選択の幅も広げるといった点においても、メリットが大きいといえましょう。平成14および15年度に、文部科学省が実施した21世紀COEプログラムは、こういった動きを促進するのに一定の役割を果たすことが期待されます。生命科学研究、教育の活性化、そして異分野の融合と新分野の醸成に向けて、筆者の所属する北海道大学でも、平成14年度、21世紀COEプログラムに「バイオとナノを融合する新生命科学拠点」が採択されたことを契機に、当拠点を構成する薬学研究科3専攻とともに、理学研究科生物科学専攻、電子科学研究所、および遺伝子病制御研究所が核になって全学的に、生命科学院・研究院（仮称）設置を検討しています。これまでの作業の中で、新組織の設置には、1) 既存の部局間の理念・目標・方法等におけるギャップをどう調整し乗り越えるか、たとえば、研究者養成とともに高度専門職業人養成をも担う分野（部局）の研究・教育とどのように調和/整合させるか、また2) 教員が新研究・教育組織に異動する時、元籍教授会と異動先教授会における人事、予算、教務（学生指導・学位審査）の議決権をどのようにするか等の問題が存在することも分かってきました。しかし、「新しい生命科学の創造と卓越した世界的研究の遂行、そして第一線の学究や指導的高度専門職業人の養成」という高邁な研究・教育理念と将来への確固たる展望をもって、新研究・教育体制構築におけるこれらの問題点を克服したいと考え、粘り強く取り組んでいます。

いうまでもなく、科学研究においては独創性や先駆性が最も重要です。独創的、先駆的成果は専門化、細分化された分野の研究に認められる場合も多くありますが、一方、独創性豊かなブレイクスルーとしての研究業績には、学際的な研究によってなされたケースも多いと思います。生命科学研究では、周辺諸科学の最新の知見、先端の技術を導入することが有用と考えられます。また、社会的ニーズをもつとともに、生命科学自身が内発的に要請し論理的必然性をもつ融合に、私たち研究者はいつも敏感かつ謙虚でなければならぬと考えます。そして、研究者が個人レベルで前向きで柔軟な発想をもち学際的（共同）研究を実施するだけでなく、広い視野に立った新しい研究・教育システムのもとで共同研究を展開して、日本発の世界をリードする創造性豊かな生命科学および周辺関連分野の研究業績をあげ、さらに国際的舞台上で伸び伸びと活躍する第一線の生命科学研究者を育てたいものです。

*北海道大学大学院薬学研究科教授